



令和7年度 宮城県鹿島台商業高等学校

学校評価結果 — 自己評価・学校関係者評価 —

I 実施状況

1 自己評価（12月）

評価者（区分）	対象・期間・方法
教職員（自己評価）	<p><対象> 教職員（教員・事務職員・常勤講師・非常勤講師） ※ SC・SSW、育休職員等除く。</p> <p><期間> 令和7年11月28日（金）～12月8日（月）</p> <p><方法> 校務支援システム「アンケート」 ※ 全23項目・4段階評価 （うち5項目は教職員独自質問） ※ 次年度の重点課題に係る選択式質問（1問） 自由記述欄を設定</p>
生徒（外部アンケート）	<p><対象> 全学年</p> <p><期間> 令和6年12月4日（水） ※ 当日欠席者は後日</p> <p><方法> Web（Microsoft forms） ※ 全22項目・4段階評価（うち4項目は生徒独自質問） ※ 自由記述欄を設定</p>
保護者（外部アンケート）	<p><対象> 全学年（兄弟姉妹がいる場合は、1回の回答）</p> <p><期間> 令和7年11月28日（金）～12月8日（月）</p> <p><方法> Web（Microsoft forms）または調査票 ※ 全21項目・4段階評価 （うち3項目は生徒独自質問） ※ 自由記述欄を設定</p>

※ 回答率

	対象人数	回答数	無回答	回答率	備考
教職員	36	36	0	100	
生徒	62	61	1	98.4	
保護者	62	53	9	85.4	兄弟等在籍4、Web19・調査票34

2 学校関係者評価（2月）

評価者	対象・期間・方法
学校評議員	<p><実施日> 令和8年2月4日（水） ※ 第2回学校評議員会</p> <p><方法> 自己評価の集計・分析結果に係る協議（意見交換等） ※ 4領域9項目・「自己評価の適切さ」及び「改善策の適切さ」の観点から4段階評価</p>

Ⅱ 自己評価（分析・考察） ※ 集計結果等は資料末尾参照。

1 全体的傾向

(1) 自己評価（教職員）

- 前年度と比べて肯定的評価（1+2：％）が増加した項目は、1項目であった（23項目中）。
 - 肯定的評価が80％を超えた項目は、21項目であった（23項目中）。
 - 10ポイント以上増加した項目はなかった（23項目中）。
 - 肯定的評価が80％を下回った項目は2項目であった（23項目中）。
- ※ 6 活発な部活動 7 活発な生徒会活動
- 10ポイント以上減少した項目はなかった。
 - 次年度に向けた重点課題で最も高かったのは「学び直し（基礎力向上）」と「特別活動（学校行事・生徒会活動等）」で、次いで「校務分掌の調整（再編）」「学びの個別最適化」と続いた。
 - 自由記述の内容は、行事と授業時数のバランスに関するもの（1名）や教育目標等を意識した授業実施・評価に関するもの（1名）であった。

〔内容〕

- ・年間を通してさまざまな行事（校内外での活動）があり、特に体験的なものは生徒の人生経験を豊かにすると感じています。一方で、各科目の授業時数の確保も大切です。行事を行った際は、その振り返りを行い、今後実施するのにか精査をしていくべきと感じます。
- ・スクールミッション・バックワードデザインを意識した、日頃の授業の実施・評価方法

(2) 外部アンケート（生徒）

- 前年度と比べて肯定的評価（1+2：％）が増加した項目は、15項目であった（22項目中）。
 - 肯定的評価が80％を超えた項目は、19項目であった。
 - 10ポイント以上増加した項目は3項目であった、
- ※ 5 相談体制 3 有意義な学校行事
20 校訓の認知度
- 肯定的評価が80％を下回った項目は2項目であった。
- ※ 6 活発な部活動 7 活発な生徒会活動
- 10ポイント以上減少した項目はなかった。
 - 自由記述では下記の内容が見られた（6名）。

〔内容〕

- ・自習中やテスト勉強中(テスト始まる前の時間)などのときに男子の話し声がうるさいので改善してほしい（1名）。
- ・楽しい生活を送ることができている（1名）。
- ・休み時間中にスマホを使えるようにしてほしい（1名）。

(3) 外部アンケート（保護者）

- 前年度と比べて肯定的評価（1+2：％）が増加した項目は、10項目であった（21項目中）。
- 肯定的評価が80％を超えた項目は、18項目であった（21項目中）。

○10ポイント以上増加した項目は1項目であった。

※ 6 活発な部活動

○肯定的評価が80%を下回った項目は3項目であった(21項目中)。

※ 6 活発な部活動 13 いじめ問題の方針・早期発見 20 PTA活動への関心

○10ポイント以上減少した項目は1項目であった。

※ 21 家庭環境・親子関係

○自由記述では、要望事項として下記の内容が見られた(1名)。また、学習活動や生活指導に関する謝意も見られた(1名)。

[内容]

・通学路について(1名)。

・日頃の学校対応について至らない点もあるかと思いますが、生徒が明るく元気に高校生活を送れるよう、今後の指導や環境改善をお願いいたします(1名)。

2 各項目の考察

(1) 共通項目 ※ 【 】は質問項目No。

【1】スクールミッションやスクールポリシーに基づいた教育課程の実践

○自己評価(教職員)における肯定的評価は、前年度と比較して0.3ポイント低下した。一方で、外部アンケート結果と比較すると、生徒より6.0ポイント、保護者より1.0ポイント高い評価となっており、教職員の学校運営や教育活動に対する認識は、外部評価と一定の差が見られる結果となった。また、外部アンケートでは、生徒が前年度比0.6ポイント、保護者が1.9ポイント増加しており、教育活動に対する評価は改善傾向にある。

○スクールミッションおよびスクールポリシーは、本校の教育目標を基盤として策定しており、学習指導をはじめとする各教育活動において、これらとの関連を意識しながら実践してきた。特に、大崎地区唯一の商業高校として、地域協働を柱とした「魅力ある学校づくり」を推進し、カリキュラム・マネジメントの充実に継続的に取り組んできた。

今後は、スクールミッション・スクールポリシーに基づく教育活動の成果や課題を、学校運営協議会を含む関係者と共有しながら、教職員間の共通理解を一層深めていくとともに、生徒・保護者・地域からより信頼される学校運営を目指していく。

なお、スクールミッションおよびスクールポリシーについては、ホームページでの公表に加え、次年度の「入学のしおり」にも掲載し、さらなる周知を図る予定である。

【2】学ぶ意欲を引き出し、学力を身に付けられる授業の実践

○自己評価における肯定的評価は、前年度と同水準で推移した。一方、外部アンケート結果と比較すると、生徒より8.0ポイント、保護者より11.0ポイント高い評価となった。外部アンケートでは、生徒が前年度比0.6ポイント増加した一方、保護者は2.2ポイント減少した。

○多くの教員が、開かれた授業づくりを意識し、日頃から教材研究や指導方法、ICTの利活用等について意見交換を行うなど、相互研鑽に努めてきた。こうした取組が、外部アンケートにおいて高い評価につながったものと考えられる。

○学年別に見ると、肯定的評価は1学年83.3%、2学年100%、3学年90.0%と、いず

れの学年においても良好な状況にある。今後も、否定的評価を示す生徒が0%となることを目指し、「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学び」の実現に向けた授業改善を継続していきたい。

○ 生徒の肯定的評価が微増していることに加え、「そう思わない」を選択した生徒が0となっていることから、教員による授業改善の工夫が多くの子に伝わっていることがうかがえる。今後は、保護者に対しても、通知表による評価だけでなく、公開授業等を通じて日常の授業の様子を直接見ていただく機会を設け、授業内容や生徒の取組への理解を一層深めていく必要がある。

【3】 基本的な生活習慣の指導の充実

○ 自己評価における肯定的評価は、前年度と比較して2.8ポイント減少した。外部アンケート結果と比較すると、生徒より6.8ポイント低い一方、保護者よりは4.7ポイント高い評価となった。今年度も、服装指導や通学路における交通安全指導など、基本的な生活習慣に関わる指導を継続的に行ってきたが、教職員の自己評価は前年度よりわずかに低下しており、生徒評価との差が見られる結果となった。このことから、指導内容のさらなる工夫や、生徒の主体的な生活改善につながる働きかけの強化が今後の課題として示唆される。

○ 日頃から、TPOに応じた挨拶や言葉遣い、制服の着こなし等について指導するとともに、欠席や遅刻が見られる生徒の保護者に対しては、担任等が細やかに連絡を行い、必要な支援に取り組んできた。また、年度当初や衣替えの時期には、登校時に服装等の一斉指導を実施し、併せて交通指導（通学マナーの指導）にも取り組んできた。さらに、長期休業前には全校集会や各ホームルームにおいて生活全般に関する指導を行い、長期休業後には生徒の状況を観察し、必要に応じて個人面談を実施している。

○ 外部アンケートにおいては、生徒・保護者ともに肯定的評価が90%を超える高い水準にあり、学校が目指す生徒像や、その具現化に向けた生活指導の取組について、一定の理解が得られているものと考えられる。今後も、全教職員によるきめ細かな支援と指導を継続し、生徒の健全な育成に努めていきたい。

【4】 進路目標の明確化に向けた指導

○ 昨年度と比較すると、生徒・保護者ともに肯定的評価のポイント数が約7ポイント増加しており、進路指導に対する評価は向上している。教職員のポイント数は昨年度より約3ポイント低下したものの、引き続き高い水準を維持している。本年度も学年に応じた進路学習を計画的に進めるとともに、新たに大学見学や自衛隊艦艇見学を実施するなど、進路意識の醸成に努めた。

○ 年間3回実施しているスタディサプリテストでは、自身の学力の伸びを客観的に把握できることから、生徒の学習意欲の向上につながっている。あわせて、進路希望調査やスタディサプリテストの結果を活用し、担任等による面談を実施したほか、進路行事への主体的な参加を促す仕組みを整えることで、生徒が自らの進路について考え、模索する時間の確保を図っている。

○ 外部アンケートにおける生徒の評価については、各学年とも肯定的評価が80%を超えており、高い水準にある。本校では、従前より系統立てたキャリア教育を推進し、「総合的な探究の時間」を要とした進路指導に取り組んできた。

○ 本校の「総合的な探究の時間」は「わらじプログラム」と称し、「わたしのミライ」「ライフデザイン」「じもと魅力発信プロジェクト」で構成している。このうち進路探究に係る学習は「わたしのミライ」と「ライフデザイン」を中心に行い、具体的な進路情報の提供や外部講師の活用を通して、生徒が自己の在り方・生き方や卒業後の進路について主体的に考えられるよう指導している。具体的には、「進路ガイダンス」「ミライセミナー」「インターンシップ」等の実施に加え、反貧困学習を位置付けた「キャリアセミナー」や「社会人準備セミナー」などを行っている。このほか、1・2学年を対象とした「ものづくり企業見学会」の実施や、2学年による「おおさき産業フェア」への参加など、地域と連携した取組を通して進路指導の充実を図ってきた。

- スタディサプリテストの結果を活用し、個人面談や保護者面談（三者面談）において具体的な助言を行うとともに、朝学習や放課後学習に活用する教材の作成などにも取り組んできた。また、例年「進路の手引」を作成し、具体的な進路活動や進路実現に向けた実務的な指導に活用している。あわせて、自律的なスケジュール管理や活動の記録を促すため「手帳」を購入させているが、十分に活用できていない面も見られた。昨年度より記入の機会は増加していることから、今後は移動教室等の際にも持参させ、授業内での活用を促すなど、さらなる定着を図っていききたい。
- 3年生の就職指導については、就職支援担当教員による個別面談や、夏季休業期間中の実践的な指導、全教員による面接指導に取り組み、きめ細かな支援を行ってきた。

【5】教育相談体制の整備・充実（SC・SSWの活用）

- 自己評価における肯定的評価は前年度と同水準で推移しており、増減は見られなかった。一方、外部アンケートとの比較では、生徒評価で3.2ポイント、保護者評価で5.7ポイント上回っており、教職員・生徒・保護者のいずれにおいても9割以上の肯定的回答が得られている。これらの結果から、本校の教育相談・カウンセリング体制は概ね良好に機能しているものと評価できる。
- 「保健だより」や「カウンセラーだより」を定期的に発行し、スクールカウンセラー（SC）およびスクールソーシャルワーカー（SSW）の来校日・勤務日を生徒・保護者に周知している。また、担任をはじめとする教職員が、悩みや不安を抱える生徒に対して相談を促すなど、SC・SSWにつなぐ役割を担い、相談体制の充実を図ってきた。
- 昨年度に続き1年生全員を対象にSCとの個別面談を実施し、生徒一人ひとりの状況把握と、個に応じた指導・支援の充実を図った。
- 年4回実施している教育相談委員会およびいじめ問題対策委員会において、支援や指導を要する生徒に関する情報共有を行い、SC・SSWの専門的な助言を参考にしながら、組織的かつ継続的な支援に努めている。
- 今後も、生徒が安心して相談できる環境を維持するとともに、早期発見・早期対応の視点を大切にしながら、教育相談体制のさらなる充実・強化を図っていく必要がある。

【6】活発な部活動

- 自己評価における肯定的評価は、前年度と比べて4.2ポイント減少した。また、外部アンケートとの比較では、生徒評価で27.6ポイント、保護者評価で21.3ポイント下回っており、部活動の充実度に対する認識に差が見られる。
- その背景として、生徒数の減少による部員不足が挙げられる。特に運動部においては、団体競技を中心に単独での大会出場が難しい状況が続いている。一方、個人競技ではバドミントン部に加え、本年度は柔道部が復活し、学校単独で大会に参加するなど、一定の成果も見られた。また、サッカー部では他校との合同による練習や大会参加を行うなど、活動の継続に向けた工夫を行ってきた。
- 各部活動においては、部員数や活動条件に応じて、生徒の自主性・自律性を尊重しながら活動を展開しており、限られた条件の中でも部活動の意義を大切に取組が行われている。
- 今後は、入学生の動向や教職員・生徒の意見、活動実績等を踏まえ、休部や廃部も含めた部活動の在り方について継続的に検討するとともに、生徒が主体となった持続可能な部活動運営・指導の充実にも努めていきたい。

【7】活発な生徒会活動（※ 委員会活動含む）

- 自己評価における肯定的評価は、前年度と比べて4.2ポイント減少した。また、外部アンケートとの比較では、生徒評価で7.9ポイント、保護者評価で11.7ポイント下回っており、生徒会

活動の活発さに対する受け止め方に差が見られる。

○ 学校行事の企画・運営については、生徒会執行部が中心となって主体的に取り組んでいる。委員会活動においても、図書委員会による「読み聞かせボランティア」を今年度は6回実施するなど、継続的な取組が行われた。また、地域の夏祭りやキッズフェスティバルへの参加など、地域貢献活動にも積極的に取り組んでいる。

○ 一方で、生徒数の減少に伴い、限られた人数の中から生徒会役員や委員を選出していることから、一人ひとりの役割や負担が大きくなる場面も見られた。これにより、活動の充実度に対する評価が伸び悩んだ要因の一つであると考えられる。

○ 今後は、少人数であっても参加しやすく、より多くの生徒が役割をもって関わられるよう、活動内容や運営方法の工夫を進めるとともに、生徒会活動や委員会活動を通して、生徒の自己肯定感や自己有用感を高める支援・指導に引き続き取り組んでいきたい。

【8】有意義な学校行事の実施

○ 自己評価における肯定的評価は、前年度と比べて2.8ポイント減少した。また、外部アンケートとの比較では、生徒評価で8.4ポイント、保護者評価で6.7ポイント下回っており、学校行事の充実度に対する受け止め方に差が見られる。

○ 学校行事については、本年度も生徒の主体性や達成感を大切にしながら積極的に取り組んできた。しかしながら、生徒数の減少により、従来どおりの実施形態を維持することが難しい場面も見られた。体育祭においては、参加人数を踏まえた種目構成の見直しを行うとともに、暑さ対策として初めて学校外施設を活用した。また、文化祭ではクラス人数の減少を踏まえ、一部の取組を学年単位で実施するなどの工夫を行った。

○ 今後は、生徒数の減少や次年度以降の学年減の見通しを踏まえ、本校単独での実施が困難となる行事については、内容の精選や実施方法の見直しを進めるとともに、新設校との合同実施等も視野に入れながら、教育的効果を高める行事の企画・運営について検討していく必要がある。

【9】地域や伝統に根ざした特色ある学校づくり

○ 自己評価における肯定的評価は、前年度と同水準で推移した。一方、外部アンケート結果と比較すると、生徒より6.0ポイント、保護者より8.0ポイント高い評価となった。外部アンケートでは、生徒が前年度比6.3ポイント増加したのに対し、保護者は2.1ポイント低下しており、立場による評価の差が見られる結果となった。

○ 2学年では、「総合的な探究の時間」の取組として、東北プレス工業株式会社およびハタナコーヒーロースターと連携し、ドリップバッグやチラシのデザイン、コーヒーのテイスティングなどの商品開発を行った。完成した商品は春の互市において販売実習として活用した。

○ 商業科目2学年「課題研究」では、秋の互市において東北プレス工業株式会社とブースを隣接して出店し、同社キャンプ用品ブランド「Orantia」のランタンシェード開発に参画した。生徒が担当したシェードデザインは商品化され、オリジナルブランドコーヒーと併せて販売に取り組んだ。

○ 商業科目3学年「地域ビジネスプランニング」では、JR東日本と連携し、「駅からハイキング」を実施した。生徒が地域の名所を来訪者に案内することで、地域資源の魅力発信と実践的な学びにつながった。

○ 図書委員会では、年間6回にわたり児童館を訪問し、読み聞かせボランティアを実施した。地域の子どもたちとの交流を通じて、社会貢献意識の醸成を図った。

○ このほか、「わらじまつり」における軽音楽部の演奏や、「キッズフェスティバル鹿島台」における生徒会役員による「おしごとたいけん」の実施など、さまざまな地域貢献活動に継続的に取り組んできた。

○ 各活動においては、当初の目標を概ね達成する成果が見られた一方で、教科横断的な学習の視点

や、学年段階に応じた活動のつながりについては、さらなる工夫・改善の余地がある。次年度も、これまでの実績と地域との互恵的な関係を大切にしながら、より一層魅力ある学校づくりを目指して学校運営に努めていく。

【10】災害・非常時の避難・連絡方法等の周知

- 自己評価における肯定的評価は、前年度と比べて 5.3 ポイント増加した。また、外部アンケート結果と比較すると、生徒より 8.1 ポイント、保護者より 7.6 ポイント高い評価となっており、災害・非常時対応に対する取組が一定の理解と評価を得ていることがうかがえる。
- 本年度は、月 1 回の教室・特別教室の安全点検、年 2 回の避難訓練に加え、生徒による消火訓練、津波警報発令時を想定した安否確認メールの送信訓練、帰宅困難者を想定した引き渡し訓練など、より実践的な防災教育を実施した。単なる避難行動にとどまらず、災害発生時の具体的な状況を想定した訓練へと内容を充実させたことが、肯定的評価の向上につながったものと考えられる。
- また、荒天時の J R 運行情報等については、一斉メールを活用し、生徒・保護者へ随時情報提供を行うなど、迅速な連絡体制の維持に努めている。
- 大崎地区（東部ブロック）職業拠点校整備に伴う工事が本格化することから、作業状況や周辺環境の変化を踏まえ、生徒に対する安全指導や防災訓練内容の見直しを行い、引き続き実効性の高い防災・安全教育の充実を図っていききたい。あわせて、生徒の登下校時における交通安全の確保にも一層努めていく。

【11】学校だより等による情報公開

- 自己評価における肯定的評価は、前年度と同水準で推移した。一方、外部アンケート結果と比較すると、生徒より 13.0 ポイント、保護者より 9.0 ポイント高い評価となった。外部アンケートでは、生徒が前年度比 1.9 ポイント、保護者が 0.2 ポイントそれぞれ低下しており、評価の受け止め方に差が見られる結果となった。
- 各種教育活動については、ホームページで随時紹介するなど、積極的な情報発信に努めてきた。また、昨年度に引き続き、学校紹介動画の発信や各種行事の紹介に加え、Instagram や Facebook などの SNS を活用した情報発信を行った。
- 前年度に引き続き、「鹿商高通信」を月 1 回発行し、生徒および保護者に配布している。併せて、J R 鹿島台駅をはじめとする地域の関係機関への配付・回覧・掲示を行うとともに、教育事務所（北部）を通じて各管内の中学校にも配布した。なお、8 月以降はホームページによる周知へ移行している。次年度以降も、在校生や保護者にとどまらず、地域社会に向けて本校の魅力を広く発信していきたい。
- このほか、在校生による出身中学校訪問（近況報告）を通じて、スクールガイド（学校案内パンフレット）の配付やオープンスクールの案内を行った。また、新聞や広報誌に対しても積極的に教育活動に関する情報提供を行い、取材を依頼するなど、広報活動の充実に努めてきた。

【12】施設・設備の整備

- 施設・設備の整備に関する肯定的評価は、昨年度と比較して生徒で 5.8 ポイント、保護者で 7.5 ポイント上昇している。敷地内で新設校の建設工事が進行する中であっても、施設・設備の維持管理状況については、概ね理解が得られているものと考えられる。
- 評価の改善に影響した要因として、暑熱環境下で課題となっていた水道水の塩素濃度低下による飲用不適合について、一定時間の通水対応に加え、9 月に高架水槽の貯水量調整を行ったことで解消できたことが挙げられる。一方、教職員の肯定的評価は昨年度より 0.7 ポイント低下しており、

ほぼ横ばいではあるものの、全体としての評価はやや低下している。施設・設備の経年劣化に伴う不具合は引き続き発生している状況にあることから、生徒・教職員の安心・安全を最優先に、閉校までの期間における適切な維持管理を継続していく必要がある。

【13】いじめ問題への対応

- 自己評価における肯定的評価は、前年度と同水準で推移した。また、外部アンケート結果と比較すると、生徒より9.6ポイント、保護者より24.5ポイント高い評価となっている。
- 「学校いじめ防止基本方針」に基づき、日常的な生徒観察や学校生活アンケートを通じた早期発見・早期対応に努めるとともに、ホームルーム活動等において未然防止に向けた指導を継続してきた。これらの取組は一定の成果を上げているものの、保護者評価との間には差が見られることから、学校における取組や対応の状況が十分に伝わっていない可能性が示唆される。
- 今後は、いじめ防止に係る取組や考え方について、情報発信の充実や保護者との丁寧な共有を図るとともに、相談しやすい体制づくりを一層進めていく必要がある。引き続き、教職員間の連携に加え、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）とも適切に連携し、より実効性の高い生徒指導体制の構築に努めていきたい。

【14】充実した学校生活（総合満足度）

- 自己評価における肯定的評価は、前年度と同水準で推移した。一方、外部アンケート結果と比較すると、生徒より16.0ポイント、保護者より9.0ポイント高い評価となった。外部アンケートでは、生徒が前年度比9.9ポイント、保護者が1.6ポイントそれぞれ増加しており、評価の向上が見られる結果となった。
- 本校では、分かる喜びやできる自信を実感させることを重視し、資格取得や放課後学習を含めた、個に応じたきめ細かな学習指導に取り組んでいる。また、自己肯定感の向上を目的として、生活支援や特別活動の工夫を行ってきた。その結果、生徒による自己評価は前年度と比較して9.9ポイント向上しており、特に生徒会活動や学校行事に対する評価の高まりが大きく影響していると考えられる。一方で、肯定的評価が低くなっている項目として、部活動に関する評価が挙げられる。部活動については、生徒数や指導者配置、施設・設備面などの課題があり、短期間での改善は難しい状況である。今後は、ボランティア活動や地域貢献活動など、生徒が多様な場面で活躍できる機会を引き続き確保し、充実した学校生活を送ることができるよう努めていきたい。

【15】資格取得に向けた指導の充実

- 資格取得に関する自己評価の肯定的評価は、令和6年度の92.1%から令和7年度は89.0%となり、前年度比で3.1ポイント減少した。一方、外部アンケートとの比較では、生徒評価が自己評価を5.0ポイント、保護者評価が2.0ポイントそれぞれ上回っており、教職員の自己評価に比して、生徒・保護者は資格取得指導を高く評価している状況がうかがえる。なお、生徒評価は94.0%、保護者評価は91.0%といずれも高い水準を維持しているものの、前年度比では生徒が2.3ポイント、保護者が3.1ポイントそれぞれ低下している。
- 本年度は、各種検定試験に向けた計画的な指導や補習等を通して資格取得支援に取り組んできた。その結果、資格取得が学習活動の一部として定着してきている一方で、達成感や指導上の工夫が生徒や保護者に十分に実感されにくくなっている可能性が示唆される。
- これらの結果は、商業科における資格取得指導が一定の成果を上げていることを示すと同時に、資格取得の意義や学習成果の意味づけについて、生徒・保護者とより丁寧に共有していく必要性を示すものである。今後は、指導方法や評価の在り方を検証しつつ、資格取得が学習意欲の向上や将来の

進路につながる取組となるよう、資格指導の一層の充実を図っていきたい。

【16】学習評価に関する規程の周知

- 学習評価に関する規程の周知について、自己評価における肯定的評価は前年度と同水準で推移した。また、外部アンケート結果と比較すると、生徒より5.0ポイント、保護者より6.0ポイント高い評価となっている。外部アンケートでは、前年度比で生徒が1.2ポイント、保護者が4.3ポイントそれぞれ増加しており、周知状況は改善傾向にあると捉えられる。
- 生徒・保護者ともに評価が向上している背景には、教職員が日頃から生徒や家庭との連絡を密にし、学習評価に関する説明を丁寧に重ねてきたことが影響しているものと考えられる。今後は、生徒の多様な実態を踏まえつつ、「指導と評価の一体化」を学校全体でより一層推進し、評価規程の理解と納得が得られるよう周知を徹底していきたい。
- 各教科の履修状況（欠課時数）や成績（欠点）に課題が見られる生徒については、状況に応じて保護者同席のもと評価規程の説明・確認を行ってきた。引き続き、個々の状況に応じた丁寧な対応を進めていく。
- 感染症や災害等によりやむを得ず登校できない生徒、長期入院・自宅療養を要する生徒、不登校傾向にある生徒など、多様な学習ニーズに柔軟に対応するため、ICT機器を活用した遠隔授業の運営に関する規程を整備することができた。本年度は当該規程に基づき、保護者の理解を得ながら適切に対応することができた。

【17】進路情報の適切な伝達

- 進路情報の適切な伝達に関する肯定的評価は、昨年度と比較して生徒・保護者ともに微減したものの、依然として高い水準を維持している。
- 2・3学年保護者を対象とした進路説明会では、保護者のニーズを踏まえて内容を精選し、必要な情報が的確に伝わるよう工夫して実施してきた。
- 外部講師を招いたキャリアセミナー等の進路行事については、事前に担当者と綿密な打合せを行い、生徒の実態に即した内容となるよう調整することで、進路に関する情報を適切に伝えることができた。
- 次年度に向けては、生徒にとってより有効な進路情報を提供するため、志望校や進路希望に関する情報共有を一層深めていきたい。また、各担任の進路指導を組織的に支援できる体制を強化し、生徒の進路意識の向上につなげていきたい。

【18】生徒や保護者の意見を聴取する機会

- 自己評価における肯定的評価は、前年度と比較して3.4ポイント減少した。一方、外部アンケート結果と比較すると、生徒より2.0ポイント、保護者より9.0ポイント高い評価となった。外部アンケートでは、生徒が前年度比9.3ポイント増加した一方、保護者は1.7ポイント低下しており、評価の受け止め方に差が見られる結果となった。
- 担任を中心に、日常的に生徒の様子を丁寧に観察し、気になる点や不安が見られる場合には、面談等を通じた支援に取り組んできた。また、7月に実施した保護者面談（三者面談）を中心に、生徒の家庭生活の状況や養育に関する不安・悩みを把握し、必要に応じて相談対応を行ってきた。
- 今後も、教職員と生徒との信頼関係を基盤に、生徒の健全な育成を目指して、保護者（家庭）との緊密な連携を図っていく。また、状況に応じて、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）など、教育相談に関わる外部専門家の助言を受けながら、支援体制の充実に努めていきたい。

(2) 独自項目 ※ 【 】は質問項目No

① 教職員

【19】学習理解を深めるための授業改善

○自己評価における肯定的評価は、全体として前年度と同水準で推移した。
○4段階評価の分析では、「3（あまりそう思わない）」を選択する生徒が微増しており、さらなる学習支援を求める声がかかってくる。少人数指導やチームティーチングの利点をより活かし、生徒一人ひとりの理解に応じたきめ細かな指導の充実を図っていく必要がある。
○国語・社会・商業を中心に、言語活動の充実や生徒主体の学び、ICTの積極的活用、実務に即した具体例の提示などにより、理解を深める授業づくりに継続して取り組んできた。その結果、教職員間で授業改善に対する共通理解が進んでいる。
○一方で、言語活動や評価の充実を重視するあまり授業時間に余裕を持ちにくい場面や、単元によって評価材料が不足する場面も見られた。授業の進め方や評価の在り方について、さらなる改善の余地がある。次年度は、生徒の理解度や学習状況を客観的に把握しながら、評価の在り方を見直すとともに、少人数指導やチームティーチングの利点、ICTの活用を生かした授業改善に継続して取り組む。

【20】学校全体やクラスの様子に係る情報の適切な伝達（生徒・保護者等）

○自己評価における肯定的評価は、前年度の97.4%から97.0%へ0.4ポイント低下したものの、依然として非常に高い水準を維持しており、概ね良好に推移している。
○本年度は、日常的な連絡や行事に関する情報提供を通して、生徒や保護者に学校・学級の様子を伝え、学級経営や学校運営への理解促進に努めてきた。また、学年内での情報共有を意識しながら、必要な情報をできるだけ適切なタイミングで伝えるよう取り組んできた。
○一方で、否定的評価がわずかに見られるようになったことや数値が微減したことから、情報発信が一方向的になりやすい点や、家庭での受け止め方に差が生じている可能性が課題として考えられる。
○次年度は、これまでの取組を継続しつつ、クラス間の情報量や発信タイミングのばらつきを減らすとともに、学校行事や日常の取組の意義がより伝わるよう内容や伝え方を工夫し、双方向性を意識した情報発信に努めていく。

【21】目指す教師像の実現

○自己評価における肯定的評価は、前年度と同水準で推移した。
○教職員一人ひとりが高い自覚を持ち、生徒にとって身近な大人としてのロールモデルとなることを意識しながら職務に当たっているものと考えられる。また、コンプライアンスチェックを毎月実施し、日常的な自己点検および相互牽制に継続して取り組んできた。今後も、生徒にとって「なりたい大人」にふさわしい教師像を目指し、各教育活動に取り組んでいきたい。

【22】学習指導や特別活動等の教育活動への積極的な取組

○自己評価における肯定的評価は、前年度と同水準で推移した。
○各分掌部・各教科に加え、各学年においても、学習のねらいや活動の目標達成に向けて、不断の見直しと改善を図りながら職務に当たっているものと考えられる。生活指導においても、日常的な細やかな声かけを大切に、教職員間で適切な情報共有を行いながら対応を進めることができている。

今後も、少人数の利点を生かしたきめ細かな教育活動の一層の充実を図っていきたい。

【23】働きやすい職場環境 ※ 令和6年度からの新規項目

- 自己評価における肯定的評価は、前年度と比較して0.4ポイント低下した。
- 担当する業務量は、職位や部長・主任（学年・教科）、担任等により差はあるものの、多くの教職員が適切なスケジュール管理を行いながら、心身の健康の保持・増進や、プライベート・家庭生活の充実を図ることができているものと考えられる。また、年次有給休暇等の取得率についても、高い水準を維持している。
- 在校時間の状況については、本年度（12月まで）の平日超過時間の月平均は約20時間であり、前年度と比較して減少傾向にある。一方、年度当初（4～6月）および年度中期（10～11月）は繁忙期にあたり、この時期には在校時間の増加や休日出勤者の増加が見られる。主な業務内容としては、行事対応、教材研究・教科指導準備、事務処理等が多い傾向にある。なお、月45時間以上の超勤者数については、前年度と同程度で推移している。
- 令和6年度入学生からの学級数減少に伴い、教員数も年次進行で減少していく見込みである。また、令和9年度の大崎地区（東部ブロック）職業拠点校の開校に伴い、本校は令和10年度末で閉校予定となっていることから、令和9・10年度には教員数が大幅に減少する見通しである。これらを踏まえ、今後は校務分掌の編成の見直しや、各種教育活動の精選を一層進め、持続可能な学校運営に取り組んでいく必要がある。

② 生徒

【19】粘り強い学習指導

- 本項目における生徒の肯定的評価は、前年度と比べて3.1ポイント減少した。4段階評価では「3あまりそう思わない」を選択する生徒が微増しており、生徒がさらなる支援を求めている状況がうかがえる。少人数の利点を生かしたチームティーチング体制を一層機能させ、より手厚い指導に努めていく必要があると考える。
- 本年度は、必修科目を中心にチーム・ティーチング（TT）を継続し、成果物へのフィードバックや演習・補習などを通じて理解促進に努めてきた。特に商業科では、簿記・情報処理・マーケティングなど積み上げ型の科目の特性を踏まえ、補足指導や演習を重視してきた。また、社会科においては「暗記科目」との意識を和らげ、達成感を得られるよう個に応じた指導を心がけてきた。
- 一方で、単独指導の場面や生徒間の学習進度・理解度の差、授業時間の制約などにより、個々の生徒に対する即時的な支援が十分に行き届かなかった可能性がある。次年度は、教科内での情報共有と協力体制をさらに強化するとともに、生徒が質問・相談しやすい環境づくりやきめ細かなフィードバックを充実させ、生徒一人ひとりに寄り添った粘り強い指導を進めていきたい。

【20】校訓の認知度

- 校訓に関する認知度について、外部アンケートの生徒では、前年度と比較して14.8ポイント増加した。
- 校訓については、入学時や年度当初などの節目に確認してきたことに加え、日常の教育活動の中でも繰り返し触れる機会を設けてきた結果、生徒の理解や意識の高まりにつながっていると考えられる。今後は、教育目標やスクールポリシーの実現に向けた各取組において、校訓に込められた思いや願いを踏まえた活動目標やねらいを、より一層意識させる指導に取り組んでいきたい。
- 校訓は、生徒にとって教育活動の中核として愛校心を高めるとともに、生徒同士や教職員との結び付きを強める役割を果たすものである。学校づくりに関わる人々が価値観を共有する拠り所とし

て、今後も校訓を大切にしたい学校運営を進めていきたい。

【2 1】落ち着いた学習環境と雰囲気醸成

○ 本項目における学校全体の肯定的評価は94.0%となり、前年度から改善が見られ、落ち着いた学習環境が整いつつある。また、「そう思う」と強く実感する生徒の割合も増加しており、学習環境に対する前向きな認識が広がっていると考えられる。

○ 本年度は、学級内の人間関係づくりや学習規律の定着、学年重点目標に基づく指導を継続してきた結果、授業や学校行事においても良好な関係を保ちながら活動できており、修学旅行も大きなトラブルなく実施することができた。

○ 一方で、少数ではあるが「あまりそう思わない」と回答する生徒が存在しており、一部の授業における学習に関係のない発言などが、周囲の学習意欲や安心感に影響を及ぼしている可能性がある。今後は、学年と教科担当がより緊密に連携し、組織的に対応するとともに、自他を尊重した言動を育む指導を継続し、より良い学習環境づくりに取り組んでいきたい。

【2 2】学校行事への積極的な取組

○ 外部アンケートにおける生徒の肯定的評価は前年度比0.9ポイント減少したものの、学校全体では85%と概ね良好な水準を維持している。一方で、学年間のばらつきが大きく、特に1学年では肯定的評価が58.3%にとどまるなど、行事への受け止め方に差が生じている状況が見られた。

○ 回答分布を見ると、「そう思う」は前年度と同水準で推移している一方、「だいたいそう思う」が減少し、「あまりそう思わない」が増加しており、行事への関わり方に対する意識の違いが表れている。生徒数の減少により一人二役の委員会活動や役割負担が生じていること、部活動の選択幅が限られていることなどが、行事への消極的姿勢につながった可能性があると考えられる。

○ そのような中でも、体育祭や文化祭では3年生を中心とした運営を下級生が支える姿が見られ、学年を超えた協力は一定程度機能していた。

○ 今後は、行事の目的や意義を生徒により分かりやすく共有するとともに、個々の特性に応じた役割分担を工夫し「参加してよかった」と実感できる場面を増やしていきたい。また、生徒が参加しやすい環境づくりや学年を超えた協力体制の強化を進め、より充実した学校行事を目指していく。

③ 保護者

【1 9】生徒の取組や教員の指導など授業への関心

○ 外部アンケートの保護者による評価は、前年度と比較して4.1ポイント減少した。

○ 授業公開の取組として、PTA総会時（4月）の授業参観および授業公開週間（年2回・5月、10月）を実施している。本年度は、PTA総会時の授業参観については前年度と比べて参観者数がやや減少したほか、授業公開週間についても参観状況は十分とは言えない結果となった。

○ 鹿商祭の一般公開については、前年度と同様に多くの保護者に来校していただくことができ、学校生活や生徒の活動の様子を直接見ていただく機会となった。

○ 今後は、保護者の教育活動に対する関心を一層高められるよう、ホームページや鹿商通信等による積極的な情報発信に加え、参観しやすい日程設定や内容の工夫を検討し、より開かれた学校づくりを推進していきたい。

【20】PTA活動への興味・関心（保護者の参画意識）

○今年度は「朝のあいさつ一声運動」について、全保護者への案内配布に加え、実施回数を昨年度の2回から4回に増やしたことで、より多くの保護者が参加できる機会を確保し、関心の向上につながった。また、昨年度に引き続き文化祭での豚汁提供・販売においてPTAが中心的役割を担ったことにより、学校活動への理解が一層深まったと考えられる。さらに、役員の半数が地元中学校の保護者であったことから連携が強化され、多くの支援を得られたことが、評価7.3ポイント増加の要因であると捉えている。

【21】親子間（家庭内）の学校生活に関する会話（親子関係）

○本項目における保護者の肯定的評価は、R6の95.6%からR7では85.0%となり、前年度比10.6ポイントの大幅な低下が見られた。
 ○背景として、出席状況が不安定な生徒がいることや、配布文書が家庭に確実に届いていない実態があり、学校からの情報が十分に共有されていない可能性が考えられる。また、登校機会の減少や3年次の進路中心の生活により、学校生活が家庭で話題になりにくくなったことも影響していると推察される。今後は、基本的な生活習慣の確立に向けた粘り強い指導を継続するとともに、家庭との連携を一層密にし、生徒の登校意欲の喚起と家庭内コミュニケーションの活性化を図っていく必要がある。
 ○生徒の話や保護者面談からは、家庭で一定の会話はなされている様子もうかがえる一方で、学校からの配布物が生徒の机や鞆に入ったままになっていたり、学校への回答が遅れたりする事例も見られた。こうした状況を踏まえ、担任から家庭への連絡を丁寧に行い、学校の様子や必要な情報が確実に伝わるよう連携を図ってきた。
 ○学校としては、日常の教育活動や行事について継続的に情報発信を行ってきたが、卒業を控えた学年という特性から、家庭内の話題が学校生活よりも進路に偏りやすかった可能性がある。本結果は、学校からの情報発信の在り方だけでなく、生徒自身が学校生活を家庭へどのように伝えているかという視点も含めて検証する必要性を示しており、今後の家庭連携の在り方を見直す重要な示唆であると捉えている。

IV 工夫・改善の方向性

領域	項目	方向性
1 学習指導	①学ぶ意欲を引き出し、学力が身に付けられる授業の実践	生徒の自己評価や授業評価の結果を踏まえ、ICTの活用を含む指導方法の工夫など、不断の授業改善に取り組む、教員の指導力向上を図る。あわせて、公開授業等の機会を通じて保護者に日常の授業の様子を見ていただくことで、通知表だけでは伝わりにくい授業内容や生徒の学びへの理解を深めていく。
	②資格取得に向けた指導の充実	生徒一人ひとりの実態に応じた課外講習の時間を確保し、授業で身に付けた知識・技能を活用できる個別指導の充実を図る。あわせて、学習の過程や成果を生徒・保護者と共有することで、学びの意義や達成感を実感できる
		<ul style="list-style-type: none"> ○ 基礎学力の定着に向けた教材研究とICTの効果的な利活用の推進 ・ 研究授業・互見授業による開かれた授業づくり ○ 授業評価や振り返りシートを活用したPDCAサイクルに基づく不断の授業改善 ○ 「シラバス」を活用した学習の見通しの共有と観点別評価の適切な実践 ・ 教科担当間における評価基準の共通理解の徹底 ○ 少人数指導及びチームティーチングの利点を生かした個に応じ

		指導を重視していく。	たきめ細かな指導 ・互いに認め合い学び合う支持的な学習風土の醸成
	③わかる喜び、できる自信を実感させる授業の工夫・改善	学習の個別最適化（習熟度に応じた学習・教材研究）と多様なニーズに応じた学習支援を推進するとともに、効果的なチームティーチングの実践を図る。また、「ICT利活用」に関する評価が低下していることを踏まえ、ICT活用が日常化した段階の次の改善を見据えた授業づくりを進める必要がある。あわせて、生徒数減少の状況に応じた指導の工夫を重ね、研究授業等を通じた教員相互の授業検討の機会を活用しながら、組織的な授業改善を一層推進していく。	○ グループワークや発表活動等を通じたコミュニケーション能力の育成 ・「主体的・対話的で深い学び」の実践 ○ 多様な学習ニーズに応じた学習支援の推進 ・特別支援教育や学習機会保障の観点から踏まえた対応 ・スタディサプリ等の学習支援ツールの積極的活用による学習の個別最適化
2 生徒支援	①挨拶やマナーなどの基本的な生活習慣の確立	挨拶、服装、礼儀、ルール・マナーについて、生徒の実態に即したたきめ細かな指導を行うとともに、問題の未然防止と改善に向けた一貫した生徒指導を推進する。また、家庭との連携を強化し、生徒一人一人に応じた支援・指導の充実を図る。基本的な生活習慣の定着に向け、年間を通じた継続的な指導を行うとともに、生徒が主体的に生活を振り返る機会を計画的に設ける。	○ 生徒の小さな変化や問題の兆候を見逃さない丁寧な観察と、組織的な情報共有に基づく適切な支援・指導の推進 ※ 教育相談（SC・SSW）の効果的活用による「支える生徒指導」の実践 ○ 自他を大切にす豊かな心の醸成
	②活発な生徒会活動や部活動	生徒が校外で主体的に活動できる機会を創出し、学校行事・部活動・生徒会活動・地域連携活動への参画を通して、自律性や協働性を育成する。また、自主的かつ持続可能な部活動運営を目指すとともに、ボランティアや地域貢献活動への参加を推進する。あわせて、少人数の実態を踏まえ、過度な負担のない役割分担や誰もが参加しやすい運営体制となるよう、部活動・生徒会活動の在り方を柔軟に見直す。	○ 問題行動等に対する説得力のある指導の徹底 ○ 生徒会執行部や各種委員会による主体的な行事等の企画・運営の推進 ○ 小規模校の利点を活かし、生徒一人ひとりが活躍できる学校行事の運営
	③有意義な学校行事の工夫・運営	小規模校としての特性や利点を十分に活かし、生徒一人一人がより主体的に参画できる活動となるよう、教育活動全体の在り方について工夫・改善に取り組む。あわせて、各種学校行事については、生徒数や学校の実態に応じた実施形態を検討し、内容や運営方法の見直しを図りながら、教育的効果を高めていきたい。	○ 学校行事等への主体的な参加を促し、生徒に自己肯定感・有用感をもたせる運営の工夫
	①進路目標の明確化に向けた適切な指導	「わらじプログラム（総合的な探究の時間）」における各種セミナー、ガイダンス、就業体験実習などの進路探究学習の充実を図り、生徒が自己の在り	○ 「わらじプログラム（総合的な探究の時間）」や特別活動を中核とした体系的なキャリア教育の推進

3 進路指導		方生き方を主体的に考え、将来を展望できる力を育成する。また、生徒の進路選択の幅を広げるため、基礎学力の向上を目指し、学年及び教務と連携しながらスタディサプリの一層の活用を推進する。あわせて、生徒が計画的かつ主体的に進路活動に取り組めるよう、手帳の活用を学校全体で促進していく。	○「進路の手引」及び「手帳」の効果的な活用と進路指導室の利活用の促進 ○高校生活3年間を見通した主体的な進路選択に向けた計画的な支援
	②進路に関する情報の提供	進路指導室の効果的な活用、三者面談や保護者進路説明会を通じた情報発信・進路相談等の充実を図る。	○個人面談・三者面談を通じた個別ガイダンス及びキャリアカウンセリングの充実
4 地域協働教育	地域や伝統に根ざした特色ある学校づくりの推進	商業科目や「わらじプログラム（総合的な探究の時間）」で培った知識・技能を活用した教科横断的な学びを推進するとともに、企業や関係機関・団体と連携し、地域経済の活性化や地域貢献につながる実践的な活動を積極的に展開することで、地域に根ざした特色ある学校づくりを進める。	○各教科で習得した知識・技術（技能）を教科横断的に活用できる力の育成 ○地域の企業・関係機関・団体等と連携した学習活動の推進 ○金融経済教育に関する実践研究の成果を踏まえた学習活動の継続 ○保護者や地域住民との交流の推進 ・ボランティア等の社会貢献活動の積極的な展開

IV 学校関係者評価

1 評価結果

領域	項目	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
1 学習指導	①学ぶ意欲を引き出し、学力が身に付けられる授業の実践	A	A
	②資格取得に向けた指導の充実	A	A
	③わかる喜び、できる自信を実感させる授業の工夫・改善	A	A
2 生徒指導	①挨拶やマナーなどの基本的な生活習慣の確立	B	A
	②活発な生徒会活動や部活動	B	B
	③有意義な学校行事の工夫・運営	B	B
3 進路指導	①進路目標の明確化に向けた適切な指導	B	A
	②進路に関する情報の提供	B	A

4 地域協働 教育	地域や伝統に根ざした特色ある学校づくりの 推進	B	A
--------------	----------------------------	---	---

2 意見・助言等 ※ 第2回学校評議員会における主な内容

評議員からは、本校の教育活動全般について、特に大きな問題点は見受けられず、概ね良好に推進されているとの意見が示された。

今後も現在の取組を継続し、安定した教育活動の実施を期待したい。

学習指導に関しては、個別指導の充実が評価される一方で、集団の中で学ぶ意義や、生徒同士が切磋琢磨する機会の重要性についての指摘があった。あわせて、学習成績の上位層と下位層の差をどのように縮小していくかについて、引き続き検討が必要であるとの意見が出された。

また、新設校の開校に伴い、今後生徒数の減少が想定される中であっても、生徒が負い目を感じたり、萎縮したりすることのないよう、学校として十分な配慮を行うことが求められている。一方で、本校の教育方針に基づいた生徒指導、進路指導、地域と連携した取組については高く評価されており、学校の方向性は適切であるとの認識が示された。

さらに、生徒の様子から、教職員の指導姿勢に対する信頼感がうかがえるとの意見があった。その一方で、自己表現力や語彙力の不足を課題として挙げ、今後は社会で求められるコミュニケーション力の育成に、より一層力を入れていくことを期待する声が寄せられた。